



7 百鶴図花瓶

加納夏雄

一対

明治二十三年（一八九〇）

銀、鍛造・彫金

花瓶…各径一六・五、高三六・五

右には上空から飛翔する鶴を、左にはそれを陸で迎える姿の鶴を、それぞれ五十羽ずつ計百羽の鶴が彫り表わされた一対の花瓶。毛彫によって陰刻された線は、金属の鑿を鈍で叩きながら彫り進めることで表わされ、鑿を筆のように用いて流麗な曲線を彫り出している。本作のように専用の鑿で線の片側を深く彫り込む手法を片切彫といい、線刻に筆線のよいうな肥瘦をつけるのに用いられる。まさに固い金属に絵を刻み込む行為であるが、水墨画と同様にやり直しはきかず、鑿の一刀々々に高度な集中力が込められている。毛彫は彫金の中では最もシンプルな技法であるが、それだけに作者の技量の巧拙も顕著にあらわれる。本作品の彫刻では、作者の自在な鑿の扱いが遺憾なく発揮されている。鶴の彫金を担当した加納夏雄（一八二八〜一九八）は、明治初年に大蔵省造幣寮の依頼で貨幣の雛型を制作するなど、時代を代表する技術の持ち主であった。

本作品は、明治二十三年（一八九〇）の第三回内国勸業博覧会に精工社から出品され、一等妙技賞を受賞し、宮内省買上げとなった。彫金部分は夏雄の担当であるが、器形と百鶴図の図案は工芸図案の指導者で精工社の代表であった岸光景（一八三九〜一九二二）が担当し、銀製の花瓶素地は鍛金家の黒川栄（一八五五〜一九一七）が担当した。夏雄は同年に制定された帝室技芸員制度の発足に伴い、彫金分野から初の帝室技芸員に任命されている。



鏝の打ち込みの角度や強弱によって、鶴を表わす線刻は深浅や肥瘦など様々な表情をみせる。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

## 明治美術の一断面——研ぎ澄まされた技と美

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 82

編集 宮内庁三の丸尚蔵館  
制作 株式会社 東京美術  
翻訳 黒川廣子  
発行 宮内庁  
平成三十年十一月三日発行

© 2018, The Museum of the Imperial Collections, Sanmomaru Shozokan